

# 第41回日本脊髄外科学会／ 第17回アジアスパイン合同開催

会 長 高見 俊宏  
(脳神経外科学教室 特別職務担当教員(教授))



第41回日本脊髄外科学会/第17回アジアスパインを3日間にわたり現地で合同開催しました。開催関係者各位の多大な協力により盛況裡に終えることができました。

日本脊髄外科学会は脳神経外科領域における脊髄外科を安全に普及することを目的として、1986(昭和61)年に第1回の研究会が開催され、現在までに1400名以上の会員を有する学会となりました。基本領域学会である日本脳神経外科学会の脊椎脊髄疾患領域における唯一の専門分科学会として発展し、現在は私自身が同学会の理事長を務めさせていただいております。今回は年次学術大会の会長を兼務することとなり、さらに国際学会であるアジアスパインとの合同開催についても責任を担うことができました。

アジアスパインは、1997(平成9)年に日本と韓国の脊髄外科学会の友好的学術カンファレンスとして始まり、2010(平成22)年からは台湾脊髄外科学会も加わり、3か国のローテーション形式で開催されています。アジアスパインの規模

は徐々に拡大しており、韓国、台湾だけでなく、インド、インドネシアなどアジア地域全体を包括する脊髄外科領域の国際学会として発展しています。

今回の合同開催による学術集会では私が会長を務め(図1)、副会長には川西昌浩先生(武田総合病院副院長)に就任していただき(図2)、本学脳神経外科学教室の同門一体となって運営することができました。

今回の合同開催では、国内・海外から950名以上の参加がありました。学会テーマを「困難への挑戦と解決策」(Challenges and Solutions: Push the boundaries)とし(図3)、困難な症例への技術的解決策から医療エビデンスに基づく治



図1(左) : Welcome receptionでの挨拶(会長 : 高見俊宏)



図2(右) : Gala dinnerでの挨拶(副会長 : 川西昌浩)



図3 : 学会ポスター

療戦略まで、国内事情だけでなく国際的視野に基づいて有意義な成果を得ることができました。

国内はもとより韓国、台湾をはじめとするアジア各国、さらには欧米からの高名な諸先生方も含め、多数の参加者を迎えて活発な議論が交わされ、最新の低侵襲手術、脊髄腫瘍、加齢性脊椎疾患、さらには先端技術を用いた手術支援システムに至るまで、多岐にわたるセッションにおいて極めて高水準な知見が共有されました。若手医師にとっては新たな技術・知見を学ぶと同時に、日々の研究成果を発表する良い機会になったものと思います。

その中でも、学術領域委員会企画シンポジウムにおいて当教室の辻野晃平先生の演題が基礎研究部門での優秀演題賞に選ばれたことは、本学の研究レベルの高さが評価された証しだと思います。また、学会プログラム後の懇親会では、友人と旧交を温めるだけでなく、新たな出会いを多く得ることができ、学術領域での新しいネットワークを構築することができました。

今回の開催にあたり、大阪医科薬科大学脳神経外科教室の教室員・同門先生方には開催準備から当日の運営まで多くのご尽力をいただきま

した(図4)。副会長の川西昌浩先生には、シンポジウム座長、セミナー講師、教育講演など学術プログラムだけでなく、懇親会の企画を含めて多方面にわたりご支援いただきました。鰐淵昌彦先生(当教室教授)には、セミナー座長を含めて多くの役割を担っていただきました。学術プログラムの決定においては、横山邦生先生(武田総合病院)には国内プログラムを、池田直廉先生(同病院)には海外プログラムを、そして福村匡央先生(当教室助教(准))には学会運営全般に尽力していただきました。今回の合同大会の開催および参加を通じ、国際的な学術交流のネットワークをさらに強固なものとすることができました。ここで得られた最先端かつグローバルな知見を基に、今後の本学における診療活動、および後進の育成にしっかりと還元してまいります。

末筆ではございますが、本学会の運営にあたり、貴重な資金援助を賜りました大阪医科薬科大学医師会の先生方に、教室員一同、心より謝辞を申し上げます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

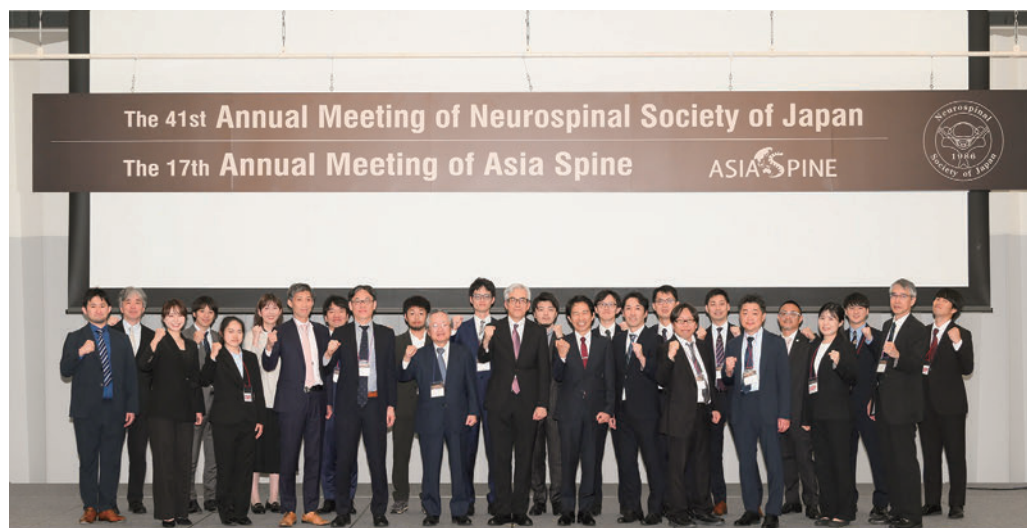


図4：脳神経外科教室の集合写真

## 第51回日本香粧品学会学術大会



会 頭 森脇 真一（皮膚科学教室 教授）

2026(令和8)年6月25日(木)、26日(金)の両日、第51回日本香粧品学会学術大会を、築瀬香織副会頭(クラシエ株式会社)とともに、東京の有楽町朝日ホールにて開催させていただきました。

日本香粧品学会は皮膚科医、化粧品研究者、薬学等の研究者からなる同好の志が集まって、香粧品及びその関連物質に関する種々の医学的および科学的問題について討論する場を作ることとを目的に1976(昭和51)年に設立されました。香粧品に関する研究成果や新たな知見を発表し、これを議論する場として毎年1回(例年6月)の学術大会を開催しています。

今回のテーマは「香粧品科学 ~The Second Stage~」といたしました。昨年に第50回記念学術大会が盛大に開催されましたので、本大会は、50年の歴史を経た日本香粧品学会としての「第2幕」(セカンドステージ)のスタートになります。次の50年に向けての新たな出発点として、これからの香粧品科学がどのように展開し発展していくのかを予測し議論する場となるようプログラムを立案しました(実は、私自身、2027(令和9)年3月に定年退任となりますので、今回の大会が自分にとって最後の学術大会会頭であり、そして間もなくやってくるのがSecond Stage(私にとって、定年後第二の人生の始まり)である、という意味も込めています)。

香粧品科学は生物学、医学の一面も持ち合わせますが、それらの分野での最先端の話題提供として2つの特別講演を企画しました。特別講



学術大会ポスター



会頭講演

演Ⅰでは、生物界で広くみられる内部共生により新たな生物機能が創出される現象を解明された深津武馬先生(産業技術総合研究所)に「共生微生物と生物進化」というテーマで、特別講演Ⅱでは再生医療における細胞組織工学研究ではトップランナーである福田淳二先生(横浜国立大学)に毛髪再生技術の最前線と今後の社会実装に関してのご講演をいただきました。日本の社会は今後ジェンダー平等で女性が益々活躍する時代になることを想定し、内科医であり、数多くのテレビ番組のコメンテーターとしてもご活躍のおおたわ史絵先生に「働く女性のメンタルヘルス」に関する文化講演をいただきました。シンポジウムはThe Second Stage 1, 2と題して、香粧品科学のこれからの未来を俯瞰しながら、大規模言語モデル、AI、美肌、香粧品の安全性、研究倫理について、各分野のエキスパートの先生方から未来に向けての情報をご提供いただきました。39の一般演題として皮膚バリア・表皮恒常性、細胞応答・代謝メカニズム、成分機能・

スキンケア有効性、皮膚安全性・免疫応答、肌状態の多角的解析について、多くの施設からの最新の研究成果をご発表いただきました。

前日、当日の地震や台風の影響が危惧されましたが、2日間で様々な職種から600名の参加者があり、大きなトラブルもなく23の企業展示もあって成功裏に終えることができました。参加者の皆様には多くの最新の知見をさらにUPDATEしていただき、今後の業務、研究、ひいてはキャリアアップの糧にいただけたのではないかと考えております。

最後に、運営面で支えていただきました大阪医科薬科大学医師会をはじめとする多くの団体の関係者に厚くお礼申し上げます。



会員懇親会での挨拶(左が築瀬副会頭)

## 第35回日本リウマチ学会 近畿支部学術集会



会 長 武内 徹（内科学IV教室 専門教授）

この度は、第35回日本リウマチ学会近畿支部学術集会の開催にあたり助成金を賜りましたことを心より御礼申し上げます。本会は2026（令和8）年9月5日より6日までの日程で神戸国際会議場において開催し、医療関係者703名（参加登録719名、2026年9月6日現在）が参加し無事終わることが出来ました。

本学術集会は「飛翔 ―リウマチ学の新たな潮流― 患者さんと共に」をテーマに、リウマチ性疾患に苦しむ患者さんのQOL向上に貢献するため、最新の知見と治療戦略を共有し、明日への医療を創造することを目的としました。リウマチ内科医・整形外科医・看護師・薬剤師・理学療法士が集まり、特別講演、11のシンポジウム、19のセミナー、ディベートセッション、

留学セミナー、70の一般演題、関節エコーおよびキャピラロスコピーのハンズオンセミナー、クイズ大会などを行いました。

特別講演では本学出身で東京大学大学院元特任教授、AI予防医学研究所の酒谷薫先生より「医療におけるAIとIOT：XAI（説明可能AI）による疾病予測と個別化予防」というタイトルでご講演を賜りました。一般健診データのみから認知機能障害リスクを定量的に推定するディープラーニングモデル「AICOG」を開発され、さらに説明可能AIを実装されました。これにより認知症のリスクだけでなく、リスクを説明する各健診項目の寄与度を可視化でき個別化予防を実現できることをお聞きし、大変感銘を受けました。

現在、関節リウマチ診療は分子標的薬の開発により著しく進歩し、臨床的寛解が現在の治療目標になっています。シンポジウムでは臨床的寛解を超えた医療の可能性を内科、整形外科、リハビリテーション、看護の立場から広く論議されました。また、全身性エリテマトーデス・血管炎症候群・脊椎関節炎においても分子標的薬や新たな低分子化合物の開発が進み、これらの最適な治療選択について幅広く意見交換ができました。さらに悪性腫瘍・間質性肺炎・肺高血圧症などの難治病態を合併した膠原病患者の治療戦略について、シンポジウム、セミナー、ディベートセッションで深く討議されました。



演台の筆者

基礎領域のシンポジウムにおいては、関節リウマチに関わる免疫細胞について講演が行われ、その病因・病態への関わりと新たな治療標的が注目されました。関節エコーおよびキャピラロスコピーのハンズオンセミナーでは多くの若手医師が参加しスキルアップに繋がりました。若手医師の臨床や研究への啓発目的で留学セミナーやクイズ大会が行われ盛況でした。未来のリウマチ学・リウマチ診療を支える医師は非常に元気であり、今後さらなる成長が期待されます。

本学術集会は、多くの企業や大阪医科薬科大学医師会を含む団体より支援を受け開催できました。今後もリウマチ性疾患に苦しむ患者さんの希望となり、リウマチ学の新たな飛翔に繋がるよう研鑽してまいります。今後も、皆様のご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。末筆ながら、本学術集会へのご支援に重ねてお礼申し上げますとともに、大阪医科薬科大学医師会のさらなる発展を祈念いたします。

